

# 近代日本における中国女性像の歴史学研究<sup>1</sup>

楊妍（東北大学）

## 一. はじめに

近代以降、清朝政府は近代化を遂げた日本に注目し、様々な改革運動を実施した。その一方で、日本の教育界も当時中国の教育機関との教育提携・交流を模索しており、日中両国の学術的な交流は清末以降から活発に行われた。日清戦争後の1898年以来、多くの中国人留学生が来日し、彼らを通じて日本の近代化モデルが中国に紹介され、中国社会の政治や社会体制を大きく動かし<sup>2</sup>。

そのような変化の中で男性と異なり、中国人女性は長期にわたって封建社会の礼儀道徳に束縛され、容易に海外に出ることができなかったが、ごく少数の革新的な女性たちは海を渡って日本に留学し始めた。

日本では江戸時代において、中国の歴史や伝統的な文化に対して尊敬の念を抱いていた民衆が多かったが、アヘン戦争での中国の敗北により、中国人に対して「チャンチャン坊主」「チャンコロ」という侮辱的な呼称が使用されるようになり、「豚尾漢」などの呼称も次第に広まっていた<sup>3</sup>。これまで近代日本における中国人像に関連する研究は非常に多いが、中国人女性の研究については、代表的な人物としての秋瑾、何香凝を除いては、十分な研究が行われてこなかった。とりわけ、この時期の中国人女性に対するイメージ、そして日本での留学経験が彼女ら自身、さらには当時の中国社会に如何なる影響を与えたのかに関する研究は未だに欠落しているようである。

服装はジェンダーを一目で表すものとして機能しうる。先行研究では「象徴的に示した女性の服飾は、女学生/遊里の女性、都市部/農村の女性、男性/女性など、着用する者や見る者の様々な感情を含みつつ、『階級』、『職分』、そして『性別』など、領域を越えて混交していく<sup>4</sup>」と指摘した。すなわち、服装を通して投影される女性像は、社会事情と照らし合わせながら読み取る必要があると思われる。『婦人画報』はその名の通り、雑誌の前半部は口絵となる写真や絵で構成されている。これらの資料は記事と同じように女性のイメージの分析が可能となる。

そこで本研究は、『婦人画報』を通じて、「服装」をめぐって「女子留学生」及び「上流階級女性」という2つの中国人女性像に着目して考察することによって、近代日中交渉史及び中国人女性の日本留学史における日中交流の一側面を明らかにすることを目的とする。

## 二. 中国人女子留学生の来日背景と経過

1905年7月、清朝政府は20名の女子学生を選抜し、日本の実践女子学校への入学を命じた。これは中国初の官費による女子留学生の海外派遣であった。それ以降、日

<sup>1</sup>本研究は、公益財団法人JFE21世紀財団の2021年度「アジア歴史研究助成」の成果の一部である。本研究の遂行にあたり、公益財団法人JFE21世紀財団より貴重な研究助成を賜りました。財団のご支援により本研究を遂行することができました。ここに深甚なる謝意を表します。

<sup>2</sup>王曉雨・陳其松「清国人日本留学生の見た「世界」とその言説」、『北東アジア研究』（30）、島根県立大学北東アジア地域研究センター、2019年、19頁。

<sup>3</sup>小松裕「近代日本のレイシズム—民衆の中国（人）観を例に—」、『文学部論叢』（78）、熊本大学、2003年3月、43～65頁。

<sup>4</sup>香川由紀子「モード雑誌の表現分析方法の可能性：『書かれた衣服』から近代女性を探る」、『東京女子大学紀要論集』62（2）、東京女子大学、2012年、157頁。

本へ留学する中国人女性の数は次第に増加していった。この傾向に対し、清政府は1910年に「女子の遊学は、母権を養成する基礎であり、その関係は極めて重大である（中略）必ず本国の教育を受け、文理が明瞭で筋道が通っており、品行が聡明で淑やかな者に限り、東渡の許可を与える。そうでなければ、本国の学堂に入学させ、海外留学を許可する必要はない<sup>5</sup>」という通令を發布した。この通令は明確に女子留学生に対する文化水準と学歴の要求を示した。天津は中国の最も早く開港した沿海都市の一つとして、比較的早い時期に西洋文明の洗礼を受け、女子の留学教育も急速に発展した。女子留学については、当時の天津の代表的な新聞である『大公報』で次のように述べられていた。

学部は各省の女学が次第に設立されつつあり、今後海外留学する者は増加の一途をたどるであろう。専門の学校を指定しなければ重きをなさない。既に駐日留学監督と協議の上定めたところによれば、今後中国の女子学生が日本へ留学する場合は、東京高等女子師範、奈良高等女子師範及び蚕桑講習所女子部の三校に入学させる。女子学生がこれらの学校に編入する場合は、定額通りに官費を支給することを認める。他の学校に転入する者はすべて自費とする<sup>6</sup>。

これ以降、天津から日本へ留学する女子学生の大部分は、主に上述した学校に入学するようになった。先行研究の分析によれば、当時の官立学校には「東京女子高等師範学校」（1874年創立）、「奈良女子高等師範学校」（1908年創立）、「東京蚕業講習所女子部」（1896年創立）が含まれていた。私立学校には「東京女子美術学校」（1900年創立）、「東京女医学校」（1900年創立）、「日本女子大学校」（1901年創立）が含まれていた<sup>7</sup>。表1は当時の天津籍女子留学生の一部の在学状況を統計したものである<sup>8</sup>。

表1. 近代における天津籍女子留学生の日本留学統計一覧表

| 氏名  | 専門分野 | 留学の年  | 卒業学校      | 留学学校       | 卒業年度  |
|-----|------|-------|-----------|------------|-------|
| 歩子方 | 理科   | 不明    | 直隶省立女師    | 東京女子高等師範学校 | 1923年 |
| 劉瑛  | 西洋画科 | 1910年 | 天津官立第三女学校 | 東京女子美術学校   | 不明    |
| 韓靜如 | 編物科  | 1911年 | 天津公立女学校   | 東京女子美術学校   | 1912年 |
| 李爽秋 | 西洋画科 | 1919年 | 不明        | 東京女子美術学校   | 不明    |
| 張印方 | 刺繡科  | 1925年 | 天津女子師範学校  | 東京女子美術学校   | 1927年 |

<sup>5</sup>『大清法規大全』第7巻、教育部・游学生、考正出版社、1972年、9頁。

<sup>6</sup>原文「學部以各省女學逐漸興辦，此後出洋留學者，自必不乏其人，非指定專校不足以重，刻已與駐日留學監督核定，嗣後凡中國女學生赴日留學者，即飭入東京高等女子師範，奈良高等女子師範及蠶桑講習所女子部三學校，凡女生補入該校，准其照額補給官費，其改入他校者均飭為自費」、本埠「女生留學之校地」、『大公報』1910年7月30日。

<sup>7</sup>董虹「近代天津女子留学研究」、『中国都市經濟』中国城市经济学会、2011年5月、213頁。

<sup>8</sup>周一川『近代中国女性日本留学史（1872－1945）』、社会科学文献出版社、2007年。

|     |              |        |               |                |        |
|-----|--------------|--------|---------------|----------------|--------|
| 張厚礪 | 1 年専修<br>造化部 | 1930 年 | 天津聖功女学<br>校   | 東京女子美術<br>学校   | 1931 年 |
| 張京先 | 文科           | 1934 年 | 天津私立中西<br>女中  | 奈良女子高等<br>師範学校 | 1938 年 |
| 孫竦  | 西洋画科         | 1935 年 | 天津南開女子<br>中学校 | 東京女子美術<br>学校   | 1938 年 |
| 吳蕭淑 | 不明           | 不明     | 不明            | 東京女医学校         | 不明     |

表 1 に示されているように、これらの女子学生の半分以上が、天津のミッションスクール、公立または私立の女学校を卒業していた。日本での学習は主に織物、刺繍などの家政業務及び西洋絵画などの芸術系専攻を中心に展開された。これは、当時の中国人女性の海外留学が、男子のように理科や工学などの学科を学ぶことを主な目的とするのではなく、「男は外・女は内」が依然として彼女たちの主要な社会的役割であったことを示している<sup>9</sup>。

これらの女子留学生は帰国後、自らの分野だけではなく近代中国の女子教育に重要な貢献をした。例えば、東京女子師範高等学校に留学した歩子方は帰国後、1924 年に直隸省初の公立女子中学に招聘された。金雅妹<sup>10</sup>は留学から帰国ののちに生涯をかけて天津の医療衛生教育事業の発展に身を捧げ、北洋女医院の院長を務め、1911 年から天津で赤十字会の設立準備を始めた。彼女が天津の医療衛生の発展に卓越した貢献をしたことは明らかである。この学校も中国初期の職業女性を養成する学校であった<sup>11</sup>。

金雅妹などの中国人女子留学生は、日本留学の経験を経て「自立」という理念を実現するために、職業女性の育成を促進する教育機関を設立し、中国人女性の自己認識を促した。さらに、近代に入ってから発行された中国の女性雑誌に掲載された多くの記事では、日本や欧米の女性が紹介された<sup>12</sup>。このように、海外の女性の状況を積極的に紹介したことは、中国人女性自らの見聞を広げる目的だけではなく、自分自身の社会における地位を認識させるためであったことがわかる。

そして、近代以降の中国では、数多くの女性雑誌が創刊され、近代国家を建設するために、女性の家庭内での役割をめぐる議論が盛んになった。また、本研究では中国の女性雑誌に限らず、その内容に多大な影響を与えた日本の女性雑誌にも注目する。このような経緯から筆者は資料としての近代日本で発行されていた女性雑誌に着目している。これにより特定の雑誌を網羅的に検証することで一定の視点から観察することができるほか、日本の代表的な女性雑誌である『婦人画報』（1905

<sup>9</sup>同注 7、董、213 頁。

<sup>10</sup>最初の中国人女子留学生は、両親を亡くして教会のアメリカ医師夫婦に引き取られた金雅妹（1864～1934）と言われている。

<sup>11</sup>同注 7、董、214 頁。

<sup>12</sup>朴雪梅の研究論文「在日中国人女子留学生の理想的女性像—『中国新女界雑誌』の翻訳記事を中心に」（『日本研究』56、2017 年）に詳しい。

～)の特性は、本研究にも非常に有益に作用するものと言える。

『婦人画報』はその豊富な婦人画像資料と文字資料により、より多くの研究者による発掘と注目に値する。明治44年の『東京朝日新聞』によると、『婦人画報』は『婦人世界』『女学世界』に次いで販売数の多い女性雑誌であったとされる。本研究において、日本留学女子学生および中国女子教育の研究にさらなる素材を提供するだけでなく、マスメディアと図像の視点から、日本の女性雑誌による中国イメージの構築手法と日本民衆の中国観を探究することもできる。

次の部分では、明治大正期の日本における中国人女性に対する認識と、その動態に関する研究の一環として、創刊当初から大正期の終結までの『婦人画報』掲載の中国人女性の口絵と記事に焦点を当てる。そして雑誌の編集者層にいかなる中国人女性のイメージが形成され、変容していくのであろうか。その基礎的な考察を試みたい。

### 三. 明治大正期の『婦人画報』(1905～1926)に見る中国人女性像

#### 3.1 日本初の女性雑誌である『婦人画報』について

日本では初の本格的な女性向け雑誌として1885年創刊の『女学雑誌』が登場して以来、女性読者の開拓を目指して次々と新雑誌が創刊されていった。これらのほとんどは、比較的「上流」の婦人を対象とした家庭雑誌であったが、明治後期には社会主義的な色合いを帯びた『世界婦人』や、「新しい女」たちによる『青鞥』など、女性解放をとらえる雑誌も誕生する<sup>13</sup>。

明治末期から大正期にかけて雑誌の量産化時代がはじまり、婦人雑誌も新たな隆盛を迎える。出版資本による新雑誌が創刊され、『婦人世界』、『婦人公論』、『主婦之友』、『婦人界』、『婦人倶楽部』など、発行部数が10万部単位を数える雑誌もいくつが生まれた。大正末には婦人雑誌の新年号の総発行部数が120万部に達したという<sup>14</sup>。

学校教育拡大を背景にリテラシーが普及し、新しいライフスタイルの一つとしてマスメディアの購読習慣が広まるとともに、先行する男性を追うような形で女性読者層が形成されていった。大正期は、大衆婦人雑誌が登場した時代であったと言えよう<sup>15</sup>。

そのうち、『婦人画報』は1905年(明治38年)7月1日の創刊から現在まで121年にわたって発行が続いている。合名会社近事画報社から刊行され、編集者は当初国木田独歩であった。都会中心のインテリ女性を対象に、お洒落と洋風の生活様式を紹介したという女性雑誌である<sup>16</sup>。

定価が25銭であった<sup>17</sup>。一方、当時の女性雑誌の通常価格は8銭前後であったため、『婦人画報』は約2倍高かったと言える。このことから、この雑誌の定価は常に当時の女性雑誌の平均消費水準を超えていたことがわかる。皇族を含む上流階級から、高等女学校卒業程度の教養を身に付けた一定の知識層をターゲットにしていたと推測される<sup>18</sup>。

「発行の辞」は「女界の活動、教育、好尚、流行等の事実を画報し得て、さらに

<sup>13</sup>木村涼子、『「主婦」の誕生—婦人雑誌と女性たちの近代』、吉川弘文館、2010年、47～48頁。

<sup>14</sup>同注13、木村、48頁。

<sup>15</sup>同注13、木村、49頁。

<sup>16</sup>塩沢実信『雑誌100年の歩み』、グリーンアロー出版社、1994年。

<sup>17</sup>津上智実、「明治大正期の『婦人画報』(1905～1926)に見るピアニスト小倉末子と閨秀音楽家たち」、『神戸女学院大学論集』59(2)、2012年、170頁。

<sup>18</sup>同注17、津上、171頁。

善美なる傾向を助長<sup>19</sup>」することを目的として創刊され、国木田独歩、鷹見久太郎、下田歌子らのような知識人がしばしば寄稿を行った。皇族、華族、上流階級の写真が多く掲載され、日本と海外の女性の活躍、女性の教育、流行の服装と髪型、育児の仕方などが紹介された。

### 3.2 『婦人画報』から見た中国人女子留学生の服装

さて1905年12月1日『婦人画報』の第2巻第8号に、初めて中国人女性が登場している。下田歌子（1854年～1936年）が経営した実践女学校では、1905年から附属女子留学生師範工芸速成科を設け、多くの中国人女子留学生を受け入れた。実践女学校は1899年5月7日に東京市麹町区元園町二丁目四番地に開校し、清末女子留学生を多く受け入れた代表的な教育機関である。

表2に示した通り、明治大正期の『婦人画報』の中では中国人女性関係の記事・写真とみなし得るものとしては、筆者の調査によれば25箇所が挙げられる。

表2.『婦人画報』に掲載された中国人女性関連一覧表（1905年～1926年）

| 刊行日        | バックナンバー | 形式 | タイトル                   |
|------------|---------|----|------------------------|
| 1905年12月1日 | 第2巻第8号  | 写真 | 下田女史と清国女学生             |
| 1906年6月15日 | 第2巻第8号  | 写真 | 清国貴婦人の上衣               |
| 1906年8月1日  | 第2巻第10号 | 写真 | 実践女学校清国留学生             |
| 1906年9月1日  | 第2巻第11号 | 写真 | 実践女学校を卒業せる清国女子留学生と其製作品 |
| 1906年2月1日  | 第3巻第2号  | 写真 | 清国女子留学生                |
| 1906年3月1日  | 第3巻第3号  | 記事 | 清国の女子教育                |
| 1906年11月1日 | 第4号     | 写真 | 寄宿舍生活と支那の音楽隊           |
| 1907年      | 第10号    | 写真 | 卒業の支那留学生               |
| 1907年      | 第10号    | 記事 | 清国の上流婦人                |
| 1907年      | 第10号    | 写真 | 清国の貴婦人                 |
| 1907年      | 第16号    | 写真 | 満州の貴婦人と北京の女学生          |
| 1908年      | 第29号    | 写真 | 音楽園の演奏会と清国女学生の演奏会      |
| 1908年      | 第31号    | 写真 | 清国の二妃殿                 |
| 1910年      | 第42号    | 記事 | 英国婦人眼中の支那家庭と婦人         |
| 1915年2月1日  | 第121号   | 写真 | 支那の嫁入風俗                |
| 1917年5月1日  | 第134号   | 写真 | 支那より                   |
| 1917年6月1日  | 第135号   | 記事 | 支那の婦人と日本の婦人            |
| 1918年1月1日  | 第142号   | 写真 | 支那公使夫人招待と長井博士祝賀会       |
| 1919年7月1日  | 第161号   | 写真 | 日支両国の親しみ               |

<sup>19</sup> 『婦人画報』第1巻第1号、1905年7月、1頁。

|            |       |    |              |
|------------|-------|----|--------------|
| 1922年3月1日  | 第195号 | 写真 | 日支婦人会の交○     |
| 1922年7月1日  | 第201号 | 写真 | 北京女学生歓迎      |
| 1923年11月1日 | 第217号 | 写真 | 支那紅十字の花々しき活動 |
| 1924年3月1日  | 第221号 | 記事 | 支那と支那婦人の印象   |
| 1924年9月1日  | 第227号 | 記事 | 支那服と支那婦人賛美   |
| 1926年11月1日 | 第254号 | 記事 | 女兒支那服作り方     |

『婦人画報』の読者層は上流階級に集中していたため、中国女性を紹介する際には基本的に清国女子留学生、貴婦人などの階級に属する女性の生活様相を紹介しており、その中の大半は写真で、写真の傍らにはいずれも文字による説明が付されていた。そのうち、中国人留学生関連の紹介は5箇所があり、全ては写真の形式である。それらの写真は、『婦人画報』の一部の編集者が中国人女性と直接接したことがあるというところから、より客観的な観点で当時の中国人女子留学生に関する実際の情報を表明できたと推測できる。

写真1は1907年第3巻第2号の『婦人画報』に掲載された、当時の女子留学生らが実践女学校で算数の授業を受けていた写真である。

写真1 【清国の女子留学生】『婦人画報』第3巻第2号（1906年2月1日）



また、彼女らの服装と外見などの方面においては、日本の習慣を守らせるようにしている。当時、日本留学中の中国人女子留学生の大部分が日本人女学生と同じく、袴に束髪というような格好していたのである。また、普段の学校生活にもかかわらず、外出時であっても、袴の着用が義務としてつけられているようである<sup>20</sup>。比較的「日本の女子と殆ど変わらない」と日本化していた様相を呈している（写真2）。

<sup>20</sup>『読売新聞』の「実践女学校卒業生」（1906年7月20日）という記事で、「入校以降は寄宿舎の修養教場の授業何くれとなく端正なる体度を保つことの至れる」という記述もある。



写真2【実践女学校の支那留学生】『婦人画報』第2巻第10号（1906年8月1日）



しかし、下田歌子が主宰した実践女学校の教育目的は、「本邦固有の女徳を啓発し、日進の学理を応用し、勉めて現今の社会に適応すべき実学を教授し、良妻賢母を養成する所とす<sup>21)</sup>」と、海外の「文明」に抵抗できるような良妻賢母という理想的な女性像を掲げ、明治日本の女子教育を方向付けていくのである。中国人女子留学生教育において、下田が良妻賢母主義の「孝」と「貞節」を教授するだけではなく、知育・徳育・体育の「三育一体論」も強調した。

しかし、これが必死に救国の方法を探しようとする一部の中国人女子留学生との間に、必ず大きな対立が出てくるのではないと思われる。当時は実践女学校で留学していた秋瑾は、中国人女性の置かれた状況に気づき、自立する道を求めるために日本で留学生生活を送りながら、中国の女性解放運動や革命運動に力を尽くした<sup>22)</sup>。

一方、実践女学校を最初に卒業した女子留学生の陳彦安は、秋瑾と同じく日本留学期間中および卒業後も積極的に中国女性の日本留学事業を推進し、中国の『教育時論』という教育系雑誌に「勸女子留学文」を発表したことがある。その後、駐日公使の章宗祥(1879-1962)と結婚し、1916年に章宗祥に随同行して日本へ赴いた後も中国人女性の日本留学を積極的に推進したが、1917年の『婦人画報』第135号において日本語で「支那の婦人と日本の婦人」という記事を発表した。

内容は日中女性の特徴を対比したもので、「日本の婦人方が、殊に一家の主婦として家庭に活動される有様は実に感服の至りと存じます<sup>23)</sup>」と日本女性の「主婦」精神に感心の念を示している。また、「一家といふものは、何れの国に於ても男女の結合によつて作らるべきものでありますから、双方の力が互格して進んで行く時に

<sup>21)</sup>阿部洋、『中国の近代教育と明治日本』、福村出版、1990年、45頁。

<sup>22)</sup>崔淑芬「秋瑾と日本」『人間文化研究所年報』第23号、築紫女学園大学・短期大学部、2012年11月、173頁。

<sup>23)</sup>陳彦安「支那の婦人と日本の婦人」『婦人画報』第135号、1917年6月1日、13頁。

初めて一家の平和と、繁昌とか得られるのであります(中略)又其情をよく美しく治めて参りましたならば、其時こそ真の婦人の美点が現はれますのですから、強ち情其物が悪いとは申されません<sup>24</sup>」と論じている。このことから、秋瑾と同様により多くの中国人女性の日本留学を推進していた陳彦安をはじめとする実践女学校の卒業生らは、下田の「良妻賢母」という女子教育理論から大きな影響を受け、女性の「家庭内の役割」を重視していたことがうかがえる。

一方、中国人女性留学生だけではなく、知的で富裕な上流階級の中国人女性に関する描写も多数掲載されていた。次の節では、当時の日本人がそれらの女性をどのような目線で見っていたのかについて論じたい。

### 3.3 『婦人画報』から見た上流階級中国人女性の服装

『婦人画報』の記事から、近代における日本人は、中国人女性を「長い間男子に圧迫せられて居つた<sup>25</sup>」抑圧された存在として捉え、また上流階級の中国人女性については贅沢浪費の生活をしているというイメージを持っていたことがわかった。

『婦人画報』創刊初期の記事では、当時の中国貴婦人の服装の写真を掲載した。例えば 1905 年掲載の清国肅親王の家族の写真や、1906 年掲載の「清国貴婦人の上衣」(写真 3)では、格式の高い中国人女性の服装が紹介されていた。しかし、写真 4 の記述から、貴婦人の普段の服装でも日本人から見ると「礼装」と見なされていたことがわかる。

当時の日本人はそのような服装に対して、実は真似できるようなものではないと見なし、もっぱら好奇心によって観賞していたことが推測される。そして日本へ留学した中国人女子留学生たちも、このような服装が認められない環境の中で、場違いな中国女性の服装を手放さざるを得なかったのではないかと考えている<sup>26</sup>。

---

<sup>24</sup>同注 23、陳、13 頁。

<sup>25</sup>田邊尚雄「支那と支那婦人の印象」『婦人画報』第 221 号、1924 年 3 月 1 日、29 頁

<sup>26</sup>程茜茜「從『婦人画報』看日本近代的中国女性觀」、浙江工商大学修士論文、2018 年。



写真3 【清国貴婦人の上衣】『婦人画報』第2巻第8号（1906年6月15日）



写真4 【満洲の貴婦人と北京の女学生】『婦人画報』第16号（1907年9月1日）



中華民国期(1912年～1949年)に入ると、先進的な中国知識人らは西洋の先進的な思想と科学技術を学び、国家の振興を図ろうとした。また、中国女性の服装もこの

新文化の歴史的潮流の中で大きな変化を遂げた。日本留学から帰国した女子留学生の唐群英は「女性にとって服装は変化であり、力であり、独立の象徴である。中国女性の服飾と髪型は長い間男性の鑑賞物とされ、抑圧されてきた。今もし我々が服装と髪型を変えなければ、生活において男性への依存から脱却することはできない<sup>27</sup>」と述べている。民主主義思想の深化と欧米服飾の影響の深まりに伴い、人々は次第に女性の服装に注目し始めた。

そして『婦人画報』では、上流階級の中国人女性の服装改良について次のように紹介している。

克明に縮らせた前髪、眼鏡、華奢な腕時計、赤の或いは黄色の一寸見はセルロイドでも拵へたらしい細いステツキをしなはせながら、大ていは巻煙草をくゆらしている。上着も裾も無論短い（中略）『あれが、即支那の新らしい婦人です』との事だつた<sup>28</sup>。（写真5）

#### 写真5 「美しく新しい支那婦人」 『婦人画報』第227号(1924年9月1日)



当時、中国の女子服装改良では、中国と西洋を融合させた服装が日本女性から称賛を受けた。『婦人画報』の編集者は次のように言及している。

便利な上からいつでも、経済の上からいつでも、美しさからいつでも、軽快さからいつでも、それから尚いくらかでも贅沢に粧へる上からいつでも、洋服なんかよりは遙にいい。文明的でもあれば芸術的でもある。のみならず日本人の体にはよりよく適当しているに違ひない<sup>29</sup>

1926年11月号の『婦人画報』には、女性用支那服の製作方法も記載されている。記事の中では型紙の作り方、裁断方法、および完成後の仕上がりについて詳しく説明されており、著者の中川原花子は「支那服の縫方は洋服の様に手数をかゝりません、夏等に流行するキモノスリーブ、ドレスと御思召せよろしい。大変御仕事も楽です<sup>30</sup>」と述べたように、当時の日本社会において女性用支那服が非常に流行していたことがわかる。

当時の中国では、女子学生と職業女性が次第に増加すると、服装への要求は簡素で

<sup>27</sup>梁鋭「孫中山先生對我國婦人解放の貢獻」、『中国婦女』1956年12月、310頁～311頁。

<sup>28</sup>水島爾保布「支那服と支那婦人讚美」『婦人画報』第227号、1924年9月1日、99頁。

<sup>29</sup>同注28、水島、93頁。

<sup>30</sup>中川原花子「女兒支那服作り方」『婦人画報』第254号、1926年11月1日、75頁。



軽快なものへと変化し始めた。この変化により、一部の日本人は中国女性の解放を理解するようになり、服装を通じた認識により、中国女性に対する印象が変化し、さらには日本女性に支那服を勧めた著者もいた。

日本の御婦人方も、あのがに股や家鴨股で女軍出征を向ふ面でやるよりも、その支那服を着た方がまだいよか(中略)爽快だ<sup>31</sup>。

1905年から1926年までの22年間において、『婦人画報』の編集者は、中国女子服装に対する視点・関心は、その複雑さと好奇心から始まり、やがて民国期に入ってから改良支那服の流行と宣伝へと変化した。これは当時の日本人の中国女性に対する印象が、旧式女性から新式女性へ転換し、伝統的な中国女性への批判や憐憫から、尊敬と賞賛へ変化したことがその背景にあると考えられる。

日本の大正時代、洋服は次第に貴族および上流階級女性に広く普及していったが、和服は依然として主要な地位を占めていた。生活改善運動に伴い、女性を対象とした女性雑誌は服装の情報の伝達において重要な役割を果たし、日本の女性雑誌には衛生面や利便性の観点から洋服の着用を奨励する記事が相次いで掲載された。一方で民国期の中国の読者にとって、女性服装の改良は新文化運動の成果の一つであり、女性解放および封建勢力への対抗を意味していた点で、日本人の意識とは明らかな相違がある。日本の服装改良は利便性を主眼とし、日本女性に最も適した服装を追求するものであった。

#### 四. おわりに

本稿では明治大正期の『婦人画報』を中心に、「服装」をめぐって「女子留学生」と「上流階級女性」という2つの中国人女性像を考察し、以下のようなことを明らかにした。

まず「女子留学生」について、『婦人画報』が伝えるところによれば、当時の日本留学は、中国人女性に対して日本の女学校規則も守らせつつ、日中両国の違いを認めながら、出来るだけ「日本人女子と変わらぬ」外見をさせるという姿勢が見られた。外見の日本化により少しでも日本人との差異を減少させようという異文化融合の姿勢がうかがえた。

また「上流階級女性」については、民国期に入ると、当時の新文化運動の興起に伴い、元々複雑な上流階級女性の服装は次第に簡素化され、着用しやすい支那服へと変化した。『婦人画報』に度々掲載された支那服に関する口絵と記事は、当時の支那服が非常に流行し、日本女性の好評を博していたことを示している。このような変化により、日本人は服装を通じて中国の女性解放を理解するようになり、服装への認識を通じて、中国女性に対する印象が大きく変化したことが読み取れた。

本稿は、明治大正期の『婦人画報』を中心として考察したが、同時期の他の女性雑誌との比較検討を行う余地を残している。特に『女学世界』『婦人世界』などの近代日本において代表的な女性雑誌の検討は非常に重要な課題だと考えられる。これらについての検討と考察は他稿に期したいと思う。

---

<sup>31</sup>同注 28、水島、92 頁。

### 主要参考文献

- ・『婦人画報』東京社 明治 38 年～大正 15 年（欠巻あり）
- ・周一川『近代中国女性日本留学史（1872－1945）』社会科学文献出版社 2007 年
- ・木村涼子『「主婦」の誕生－婦人雑誌と女性たちの近代』吉川弘文館 2010 年
- ・塩沢実信『雑誌 100 年の歩み』グリーンアロー出版社 1994 年
- ・阿部洋『中国の近代教育と明治日本』福村出版 1990 年